志賀直哉

志賀直哉

新潮社版

日本文学全集　11

志　賀　直　哉

発行／1967年9月15日　十一刷／1969年10月25日
発行者／佐藤亮一　東京都新宿区矢来町71
発行所／株式会社・新潮社　東京都新宿区矢来町71
電話東京(260)1111(大代)　振替東京808　郵便番号162
印刷所／光邦印刷株式会社　製本所／大日本製本所
本文用紙／本州製紙株式会社
函貼／三菱製紙株式会社　製函／文京紙器株式会社
カバー・扉・見返／特種製紙株式会社
表紙クロス／日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします　Printed in Japan 1967

目次

網走まで　七
剃刀　一五
清兵衛と瓢箪　二三
城の崎にて　二九
好人物の夫婦　三五
十一月三日午後の事　四七
小僧の神様　五三

焚火　五六
雨蛙　五七
痴情　五八
邦子　六一
万暦赤絵　六三
*
暗夜行路　七三
*
灰色の月　七五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

自転車　四七九
注解　四八九
年譜　四九七
解説　荒正人　五〇九

志賀　直哉

網走まで

宇都宮の友に、「日光の帰途には是非お邪魔する」と云ってやったら、「誘って呉れ、僕も行くから」と云う返事を受け取った。

それは八月も酷く暑い時分の事で、自分は特に午後四時二十分の汽車を選んで、兎に角その友の所まで行く事にした。汽車は青森行である。自分が上野へ着いた時には、もう大勢の人が改札口へ集って居た。自分も直ぐ其仲間へ入って立った。

鈴が鳴って、改札口が開かれた。人々は一度にどよめき立った。鋏の音が繁く聞え出す。改札口の手摺へつかえた手荷物を口を歪めて引っぱる人や、本流から食み出して無理に復、還ろうとする人や、それを入れまいとする人や、いつもの通りの混雑である。巡査が厭な眼つきで改札人の背後から客の一人々々を見て居る。此処を辛うじて出た人々はプラットフォームを小走りに急いで、駅夫等の「先が空いてます、先が空いてます」と叫ぶのも聞かずに、吾れ先きと手近な客車に入りたがる。自分は一番先の客車に乗るつもりで急いだ。

先の客車は案の定ずいていた。自分は一番先の車の一番後の一ト間に入った。後方の客車に乗れなかった連中が追々此処までも押し寄せて来た。それでも七分しか入って居ない。発車の時がせまった。遠く近く戸をたてる音、そのおさえ金を掛ける音などが聞える。自分の居る間の戸を今閉めようとした帽に赤い筋を巻いた駅員が手を挙げて、

「此方へいらっしゃい。こちらへ」と戸を開けて待って居る。所へ、二十六七の色の白い、髪の毛の少い女の人が、一人をおぶい、一人の手を曳いて入って来た。汽車は直ぐ出た。

女の人は西日のさす自分とは反対側の窓の傍に席を取った。又其処しか空いて居なかったので。

「母さん、どいとくれよ」と七つ許りの男の子が眉の間にしわを寄せていう。

「ここは暑ごさんすよ」と母は背の赤児を下しながら静かに云った。
「暑くたっていいよ」
「日のあたる所へ居ると、又おつむが痛みますよ」
「いいったら」と子供は恐ろしい顔をして母をにらんだ。
「滝さん」と静かに顔を寄せて、「これからね、遠い所まで行くんですからね。若し途中で、お前さんのおつむでも痛み出すと、母さんは本統に泣きたい位困るんですからね。ね、いい児だから母さんの云う事を肯いて頂戴。それにね、いまに日のあたらない方の窓があくから、そうしたら直ぐいらっしゃいね。解りましてて？」
「頭なんか痛くなりゃ仕ないったら」と子供は尚ケンケンしく云い張った。母は悲しそうな顔をした。
「困るのねえ」
自分は突然、
「此処へおいでなさい」と窓の所を一尺許りあけて、
「此処なら日が当りませんよ」と云った。
男の子は厭な眼で自分を見た。顔色の悪い、頭の鉢の開いた、妙な子だと思った。自分はいやな気持がした。子供は耳と鼻とに綿をつめて居た。
「まあ、どうも恐れ入ります」女の人は悲しい顔に笑を浮べて、「滝さん、御礼を云って、あそこを拝借なさい」と子の背に手をやって此方へ押すようにする。
「いらっしゃい」自分は男の子の手を取って自分の傍に坐らせた。男の子は妙な眼つきで時々自分の顔を見て居たが、少時して漸く外の景色に見入った。
「なるたけ、其方ばかり見て居たまえよ、石炭殻が目に入るから」
こんな事をいっても男の子は返事を仕ない。やがて浦和に来た。此処で自分と向い合っていた二人が降りたので、女の人は荷と一緒に其処へ移った。荷といっても、女持の信玄袋と風呂敷包が一つだけだ。
「さ、滝さん、こちらへ御いでなさい。どうもありがとう御座いました」女の人はそう云ってお辞儀をした。動いたので今までよく眠って居た赤児が眼を覚して泣き出した。母は、
「よしよし」と膝の上でゆすりながら、「チチカ、チチカ」とあやすように云うが、赤児は踏反りかえって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

益々泣く。「おおよしよし」と同じような事をして、今度は、「うま、上げよう」と片手で信玄袋から「園の露」を一つ出してやる。それでも赤児は泣きやまぬ。わきからは、

「母さん、あたいには」とさも不平らしい顔をして云う。

「自分で出して、おあがんなさい」といって母は胸を開けて乳首を含ませ、帯の間から薄よごれた絹のハンケチを出して自分の咽の所へ挟んでたらし、開いた胸を隠した。

男の子は信玄袋の中へ手を入れて探って居たが、

「ううん、これじゃないの」と首を振る。

「それでないって、どんなの？」

「玉の」

「玉のはない。あれは持って来なかった」

「いやだあ！　玉のでなくちゃ、いや」と鼻声を出す。

「其下にドロップが入ってますから、それをおあがんなさい。ね、いい児、ドロップでもおいしいのよ」

男の子は不承々々うなずく。母は又片手でそれを出して子の手へ四粒ばかり、それをのせた。

「もっと」と男の子が云う。母は更に二粒足した。

乳に厭きた赤児は、母の髪から落ちたバラフの櫛をいじって、仕舞にそれを口へ入れようとする。

「いけません」と母が其小さな手を支えると、赤児は口を開いて、顔を其方へもって行く。下の歯ぐきに小さく白い歯が二つ見えた。

「さ、うまうま」膝の上へ落ちた「園の露」を顔の前へ出すと、あーあーと云って居た赤児は黙って、眼の玉を寄せて暫く見つめていたが、櫛を放してそれを取る。そして握り拳のまま口へ入れようとする。其口元からタラタラと涎水がたれた。

女の人は赤児を少し寝せ加減にして、股の間へ手をやって見た。濡れて居たらしかった。

「おむつを更えましょうね」こう独言のように云って更に男の子に、

「滝さん、少しそこを貸して頂戴、赤ちゃんのおむつを更えるんですから」

「いやだなア——母アさんは」と男の子はいやいや起つ。

「此処へお掛けなさい」と自分は再び前に掛けさせた

場所を空けてやった。
「恐れ入ります、どうも気むずかしくて困ります」女の人は寂しく笑った。
「耳や、鼻のお悪いせいもあるでしょう」
「御免遊ばせ」と女の人は後を向いて包から乾いたおしめと濡れたのを包む油紙とを出しながら、
「それもたしかに御座います」という。
「何時頃からお悪いんですか」
「是は生れつきで御座いますの。お医者様は是の父が余り大酒をするからだと仰有いますが、鼻や耳は兎に角つむりの悪いのはそんな事ではないかと存じます」
腰掛に仰向けに転がされた赤児は的もなく何か見詰めて、手を動かして、あーあーと声を出していた。間もなくおしめを更え、濡れたのを始末して母は赤児を抱き上げると、
「ありがとう御座いました……サア滝さん、此方へいらっしゃい」と云った。
「かまいません、此処へお出でなさい」と云ったが、男の子は黙って立って向う側へ腰かけると直ぐ窓へよりかかって外をながめ始めた。
「まあ、失礼な」女の人は気の毒そうに詫を云った。
少時して自分は、
「どちら迄おいでですか」と訊いた。
「北海道で御座います。網走とか申す所だそうで、大変遠くて不便な所だそうです」
「何の国になってますかしら?」
「北見だとか申しました」
「そりゃあ大変だ。五日はどうしても、かかりましょう」
「通して参りましても、一週間かかるそうで御座います」
汽車は今、間々田の停車場を出た。近くの森から蜩の声が追いかけるように聞える。日は入った。西側の窓際に居た人々は日除け窓を開けた。涼しい風が入る。今しがた、母に抱かれたまま眠入った赤児の一寸許りに延びた生毛が風におののいて居る。赤児の軽く開いた口のあたりに蝿が二三疋うるさく飛びまわる。母はじッと何か考えて居たが、時々手のハンケチで蝿をはらった。少時して女の人は荷を片寄せ、其処へ赤児を寝かすと、信玄袋から端書を二三枚と鉛筆を

出して書き始めた。けれども筆は却々進まなかった。
「母アさん」景色にも厭きて来た男の子は、ねむそうな眼をして云った。
「なあに？」
「まだ却々？」
「ええ、却々ですからね、おねむになったら母アさんに倚りかかって、ねんねなさいよ」
「ねむかない」
「そう、じゃ、何か絵本でも御覧なさいな」
男の子は黙って首肯いた。母は包の中から四五冊の絵本を出してやった。中に古い*パックなどが有った。男の子は柔順しく、それらの絵本を一つ一つ見始めた。
其時自分は、後へ倚りかかって、下目使いをして本を見て居る男の子の眼と、矢張り伏目をして端書を書いて居る母の眼とが、そっくりだという事に心附いた。
自分は両親に伴われた子を——例えば電車で向い合った場合などに見る時、よくもこれらの何の類似もない男と女との外面に顕れた個性が小さな一人の顔なり、身体つきなりの内に、しっとりと調和され、一つになって居るものだと云う事に驚かされる。最初、母と子とを見較べて、よく似て居ると思う。次に父と子とを見較べて矢張り似て居ると思う。そうして、最後に父と母とを見較べて全く類似のないのを何となく不思議に思う事がある。
今、此事を思い出して、自分は此母に生れた此子から、その父を想像せずに居られなかった。そうして其人の今の運命までも想像せずに居られない。
自分は妙な聯想から此女の人の夫の顔や様子を直ぐ想い浮べる事が出来た。自分が元いた学校に、級はそれ程違わなかったが年はたしかに五つ六つ上で、曲木という公卿華族があった。自分は其男を憶い出した。彼は大酒家であった。大酒をしてはいつも、大きな事を云って居た。鷲鼻の青い顔をした、大柄な男で、勉強は少しもしなかった。二三度続けて落第して、とうとう自分で退学して了ったが、日露戦争後、上州製麻株式会社とかいうのの社長として、何かの新聞で其名を見たぎり、今はどうして居るか更に消息を聞かない。
自分は不図此男を想い浮べて、あんな男ではないかしらと思った。然し彼は大言壮語をするだけで別に気

六ケしいという男ではなかった。何処か快活で、ヒョウキンな所さえあった。尤も、そんな性質はあてにならぬ事が多い。如何に快活な男でも度々の失敗に会えば気六ケしくもなる。陰気にもなる。きたない家の中で弱い妻へ当り散らして、幾らか憂いをはらすと云うような人間にもなる。

此の子の父はそんな人ではないだろうか。

女の人は古いながらも縮緬の単衣に御納戸色をした帯をメて居る。自分には、それらから、女の人の結婚以前や、其当時の華やかな姿を思い浮べる事が出来る。更に其後の苦労をさえ考える事が出来た。

汽車は小山を過ぎ、小金井を過ぎ、石橋を過ぎて進んだ。窓の外は漸く暗くなって来た。

女の人が二枚端書を書き終った時、男の子が、

「母アさん、しっこ」と云い出した。此客車には便所が附いていない。

「もう少し我慢出来ませんか？」母は当惑して訊いた。男の子は眉根を寄せてうなずく。

女の人は、男の子を抱くようにして、あたりを見廻したが別に考もない。

「もう少し、待ってネ？」と切りになだめるが、男の子は身体をゆすって、もらしそうだという。

間もなく汽車は雀の宮に着いたが、車掌に訊くと、其間はないから此次になさい、という。此次は宇都宮で八分の停車をする。

宇都宮まで、どんなに母は困らされたろう。其内に眠って居た赤児も眼を覚した。母はそれへ乳首を含ませながら、只、

「もう直ですよ」という言葉を繰り返して居た。此母は今の夫に、いじめられ尽して死ぬか、若し生き残ったにしても此児に何時か殺されずには居まいと云うような考も起る。

やがて、ゴーウと音をたてて、汽車はプラットフォームに添うて停車場へ入った。未だ停らぬ内から、

「早くさ早くさ」と男の子は前こごみに下腹をおさえるようにしていう。

「さあ、行きましょう」母は膝の赤児を腰掛けに下し、顔を寄せて、「柔順しく待ってて頂戴よ」といい、更に自分に、「恐れ入ります、一寸見てて頂きます」

「よう御座います」と自分は快く云った。

汽車は停った。自分は直ぐ扉を開けた。男の子は下りた。

「君ちゃん、柔順しくしてるんですよ」と其処を離れようとする背後から、手を延べて赤児は火のついたように泣き出した。

「困るわねえ」母は一寸ためらったが、包から、スルスルと細い、博多の子供帯を出すと、赤児の両の腋の下を通して、直ぐ背負おうとしたが、袂から木綿のハンケチを出して自身の襟首へかけ、手早く結いつけおんぶにして、プラットフォームへ下り立った。自分も後から下りて、

「じゃあ、私は此処で下りますから」といった。女の人は驚いたように、

「まあ、そうで御座いますか……」と云った。そして、色々、ありがとう御座いました」と女の人は叮嚀にお辞儀をした。

人ごみの中を竝んで歩き出した時、

「恐れいりますが、どうか此端書を」こういって懐から出そうとするが、博多の帯が胸で十文字になって居るので、却々出せない。女の人は一寸立ち止った。

「母アさん、何してんの」と男の子が振りかえって叱言らしく云った。

「一寸、待って……」女の人は頤を引いて、無理に胸をくつろげようとする。力を入れたので耳の根が、紅くなった。其時、自分は襟首のハンケチが背負う拍子によれよれになって、一方の肩の所に挾まって居るのを見たから、つい、黙ってそれを直そうと其肩へ手を触れた。女の人は驚いて顔を挙げた。

「ハンケチが、よれていますから……」こう云いながら自分は顔を赧らめた。

「恐れ入ります」女の人は自分がそれを直す間、ジッとして居た。

自分が黙って肩から手を引いた時に、女の人は「恐れ入ります」と繰り返した。

吾々は、プラットフォームで、名も聞かず、又聞かれもせずに、別れた。

自分は端書を持ったまま停車場の入口へ来た。其処に函のポストが掛ってあった。自分は端書を読んで見たいような気がした。又読んでも差支えないというような気もした。

自分は一寸迷ったが、函へよると、名宛を上にして、一枚ずつそれを投げ入れた。入れると直ぐもう一度出して見たいというような気もした。何しろ、投げ込む時ちらりと見た名宛は共に東京で、一つは女、一つは男名であった。

（明治四十三年）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong